

建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究：  
狂想と国家を双肩に担ったモニュメント

鈴木 佑也

本研究では、ソヴィエト建築史上最大規模を誇る建築競技設計が催され、実現することがなかった建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿を対象とし、その成り立ちから頓挫まで史実的な裏付けによって明らかにすることを目的としている。導入部では建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が、1930年代においてソヴィエトの社会で「一大国家建築プロジェクト」と位置付けられていた理由を取り上げている。この具体例として、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が絵画作品や都市計画などでどのように紹介され、また都市計画でどのように、当時のソヴィエトにおける文化政策とどのように関連していたのかを説明している。このことによって建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の概要を紹介し、本研究の方向性が述べられている。

第一にソヴィエト宮殿は、宮殿という建築物の類型的な名称を伴っている。この名称を伴う建築プロジェクトはソヴィエト宮殿が登場するまでにいくつかあったものの、あまり紹介されてこなかった。この点を鑑みて、ソヴィエト政権樹立後から競技設計ソヴィエト宮殿までに計画された宮殿型の建築物、特にその名を冠する競技設計を1章では取り上げる。対象とする時期（1917-1931）には、宮殿という名が用いられた競技設計はいくつか存在しており、その中でも政治上のシンボルとして位置付けられたものはそれほど多くない。ソヴィエト宮殿は単なる建築物としてのみならず、国家ないしはソヴィエトにおける社会主義体制を象徴化した建築プロジェクトであった。それと同じような機能ないしは役割が求められた建築プロジェクトのみを1章で取り上げることにした。ソヴィエト宮殿の競技設計以前における宮殿型建築物の競技設計では、どのような特徴が見られ、またどのような経緯を辿ったのか。こうした疑問点を明確にするためにこの章で扱う建築プロジェクトの競技設計内容を明らかにし、それぞれの競技設計で主催者が宮殿型建築物に求めたコンセプトを明らかにしている。競技設計ソヴィエト宮殿に至るまでの宮殿型建築物の特徴とその変遷を知ることにより、ソヴィエト建築史におけるソヴィエト宮殿の類型を把握することができる。

このようにソヴィエト宮殿の前提を把握した上で、2章では競技設計ソヴィエ

ト宮殿の分析を行うことにする。数多くの先行研究では、ソヴィエト宮殿の構想が公にされる時期が明らかにされている。だが、実際に競技設計として企画される段階、特に競技設計の準備段階において、どのような経緯を辿ってきたかという点は多くの先行研究では曖昧なままであった。この点をアーカイヴ資料に基づき明らかにするとともに、提出された設計案を空間構成別に分析することで、それぞれの巡回（準備段階を含め、全4巡回）で注目すべき特徴を取り上げている。

ソヴィエト宮殿の具体的な機能や性質が競技設計を通じて形成され、建築物としての構想が具体的に固まっていく経緯を把握した上で、3章では建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が建設段階の経緯を辿っている。建設段階の過程で、ソヴィエト宮殿の建設事業を実質的に運営する機関（ソヴィエト宮殿建設局）は内部空間構成を設計するにあたり、アメリカの建設業者に助言を求め、技術提携を試みていたことが、アーカイヴ資料によって明らかになった。このようなアメリカ建設業者との技術提携を求めて、ソヴィエト宮殿の設計に任命された建築家が欧州各国とアメリカに派遣されている。派遣の目的は、ヨーロッパとアメリカの歴史的建築物と最新の大型建築物を学び、ソヴィエト宮殿の設計に活かすためであった。この経験は、ソヴィエト宮殿の構造（地盤、基礎、骨組み、荷重、建築材料等）に反映され、そこで生じる課題克服に向けた動きがなされることとなった。その一方で当時の建築潮流であった歴史主義建築を求める影響によって、モニュメント性がより強められることとなる。こうしたことを鑑みると、ソヴィエト宮殿の実現に向けた動きとその中で生じた問題をこの章では明らかにしている。

ソヴィエト宮殿の建設段階段階における問題点と最終的な方向性を確認した後、四章では最終設計案が提出された後、この建築プロジェクトが最終的にどのようなかたちで幕を閉じたかが記されている。ソヴィエト宮殿を扱った数多くの先行研究では、競技設計後の建設段階におけるソヴィエト宮殿の歩みやこの建築プロジェクトが中止ではなく凍結されたこと、また第二次世界大戦後再び建設作業凍結解除に向けて設計を担当する建築家や建設作業を組織する建設局が様々な交渉を行っていたという事実はほとんど言及されていない。多くの先行研究では1941年の建設作業凍結を以てソヴィエト宮殿プロジェクトが中止となったかのように紹介されている。だがアーカイヴ資料を基にすると、建設作業凍結は一時的なものであり、第二次世界大戦後は作業が再開される見通

しであった。また第二次世界大戦中と大戦後において、結果としてソヴィエト宮殿の建設作業が再開されなくなるが、その作業を請け負うソヴィエト宮殿建設局はその肩書きを保持しながら他の建設作業および建築物の設計に携わっている。彼らが携わった事業の中には戦後の都市復興作業やモスクワの歴史的建築物の修復、モスクワの新たなシンボルとなる高層建築物などが含まれている。

このような流れと同時に建設作業再開に関する提案を1952年までに設計者は行っている。最終決定された設計案の修正が何度か行われ、ソヴィエト宮殿に関する最高決定機関の閣僚会議に対して建設作業再開に向けた審議再開の要求が呼びかけられている。その回答として閣僚会議はソヴィエト宮殿の建設作業再開ではなく、新たな別事業を建設局に割り振り、またソヴィエト宮殿に関連する事業費は1950年代に入ると既に捻出されなくなっている。こうしたことは、ソヴィエト宮殿プロジェクトの優先度が低くなったということを示している。1958年に再び新たなプログラムに沿ってソヴィエト宮殿の競技設計が行われる。名称は同一であるが、1931年に行われた競技設計と全く異なるものであると言える。なぜならば、1952年までに整備されていた建設に関する規約や組織に則ったものではないからだ。どの段階で中止もしくは建設再開を巡る動きが途絶えたかという点は、当時の公の建築雑誌からでは見出すことはできない。この点を、再びアーカイヴ資料に基づきながら、整理し、建築プロジェクトソヴィエト宮殿の結末が述べられている。

結びでは、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿全体の特徴を次の3つにまとめている。ソヴィエト宮殿は第一にイデオロギー的性質を備えた建築物の集大成、加えてあらゆる機能を内包した建築物として考案され記念性を追求した結果、国家建築様式の先駆けとなり、第二に首都モスクワの都市計画の中心に据えられることで、実現に向けた強迫観念を生じさせ、そして第三にこうした特徴がI.スターリン信奉を強化する価値体系を担うものであった。I.スターリン死後になされたいわゆる「スターリン批判」では、そうした価値体系を形成した政治体制及び個人崇拜が断罪され、それと結びつくかたちでソヴィエト宮殿の見直しが言及されている。これによって、この建築プロジェクトは公式上中止となった。

以上から、本研究において、ソヴィエト宮殿がその始まりから終わりまで国家建築プロジェクトとしての性質を担っていたということが明らかになったのである。